Osaka University Knowledge Archive

Title	観光資源としての関西歌舞伎
Author(s)	以倉, 理恵
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53891
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　以倉 理恵　）	
論文題名	観光資源としての関西歌舞伎

論文内容の要旨

本論文は、観光資源としての関西歌舞伎を研究の対象とする。大阪の歌舞伎興行の復興に尽力した「関西で歌舞伎を育てる会」 (以下、『育てる会』)を再評価し、そのうえで関西歌舞伎の観光資源の潜在性を検討し、観光資源としての価値づけを行うことを目的とする。

これまで別々に議論されてきた伝統芸能・文化財・総合芸術である歌舞伎[1]について、現在、大阪で興行されている歌舞伎を取り上げ、観光資源としての価値を強調する。とりわけ、「育てる会」の取り組みにより定期公演となった「七月大歌舞伎」を「関西歌舞伎」と定義し、本論文の対象とする。歌舞伎を対象とする研究では諸分野が重層的に関係しあっているが、副次的な概念である観光資源という検討に本論文の独自性がある。本論文は、時間軸に沿って検討時期を二期に設定し、それぞれの時点において、観光資源としての関西歌舞伎の位置づけを試みた。本論文は関係主体へのインタビュー調査と同会から提供された内部資料、一次文献を資料とする。

今日、歌舞伎興行は全国的に活況を呈している。東京の歌舞伎座や京都南座の顔見世公演など、それぞれの都市にとって歌舞伎興行は、集客力を持ち芸術文化を提供するものとして、都市の価値を高める要素である。また「関西・歌舞伎を愛する会」 (以下、『愛する会』) と冠する大阪松竹座の「七月大歌舞伎」は、プレ・イベントの船乗り込みとともに大阪の夏の風物詩になっている。歌舞伎は国の重要無形文化財であり、ユネスコ世界無形文化遺産でもある。同時に人々の娯楽の対象としての商業演劇である。歌舞伎はこのように重層的な価値を形成しながら、今日に至っている。本論文は、関西歌舞伎について観光資源という新たな価値を模索する試みである。

本論文の構成は次のとおりである。本論文は全7章で構成される。第1章で、論文の目的と対象、研究の背景、論文の構成を述べた。第2章では、時代の変遷とともに変容した歌舞伎の価値について、歌舞伎の黎明期である近世から戦後までを概観した。さらに、関西歌舞伎と混同しがちな「上方歌舞伎」の用語を整理した。そして、本論文の対象時期の前史にあたる、戦後の大阪における歌舞伎興行の衰退期について考察した。大阪の歌舞伎興行が最も低迷した時期は「昭和30年代」であり、そのなかで歌舞伎の復活のために貢献した3つの活動について言及した。すなわち「武智歌舞伎」、「七人の会」、「仁左衛門歌舞伎」であり、尽力は評価されたが、それらは一時的な成功にとどまり、大阪における歌舞伎興行は衰退の一途をたどる。ここまでが第2章で説明した前史である。

本論文は、対象である「育てる会」(改称後は、『愛する会』) について二期に分けて検討している。第一期についての先行研究と研究方法を第3章で述べ、その検討結果を第4章で提示した。第二期についての先行研究と研究方法を第5章で述べ、その検討結果を第6章で提示した。第一期は、1978年に「育てる会」が設立され、翌79年に「育てる会」第一回公演を行った初動時期と設定した。そののち同会は、恒例となる夏の本興行を支援し、1992年に「愛する会」に改称して現在まで37年に渡る活動を継続している。第二期は、1980年の同会第二回公演から1997年に大阪松竹座が新開場するまでが

[1] 歌舞伎には、全国で民間非営利に運営されている地歌舞伎などもあるが、本論文では、松竹株式会社(以下、松竹)により商業的に運営されている歌舞伎を対象とする。現在、国立劇場での伝統芸能の保存と振興を使命とした歌舞伎上演があるが、商業的な歌舞伎興行は松竹一社が寡占している。

対象になる。

では、具体的な方法論と結論を以下に述べる。第3章で第一期における方法論を提示する。関西歌舞伎を観光資源として位置づけるために、観光学における研究より都市ツーリズム論と、人類学における研究より資源論を援用する。「育てる会」は大阪の歌舞伎興行の復興を目的として、歌舞伎俳優の澤村藤十郎が提唱し、それを労働組合が支援して設立された。そこから多岐に渡る人脈へ賛同を訴え、「育てる会」は松竹と連携して第一回公演を「大成功」させ、画期的な業績を作ったのである。この成功をもとに「育てる会」は、新規観客を獲得する企画を松竹へ次々と提案し、観客層を広げる活動を展開することになった。第4章では、「育てる会」、松竹、在阪マスコミ・評論家、行政、観客という諸主体が「歌舞伎の復興」という目的にむかって取り組んでいく過程を資源化という概念で捉えた。そして資源化が行われた大阪という固有の場の文脈において観光資源としての価値が生成されたことを考察した。このように諸主体による働きかけのプロセスに焦点をあてることにより、当初は明確に意図されてなかった価値や顕在化されていない価値をみいだすことが可能となり、初期の目的からの差異や「ずれ」にこそ資源の潜在的な価値が認められるということを論証した。その潜在性を積極的に捉え、まず第一期において、関西歌舞伎について観光資源としての価値を検討した。

次に、第5章で、観光資源の価値づけの根拠となる定義と分類を提示し、次章の分析視点となる3つの理論を提示した。3つの理論とは、観光学で論じられる観光資源の価値、文化経済学で論じられる芸術文化の価値、文化政策学で論じられる劇場の機能である。第二期は、第4章で示された観光資源としての価値を追認する作業から始まる。そのうえで、これらの3つの観光資源概念の論点を踏まえ、第6章において、第二期に至るまでの諸相を叙述することによって観光資源としての側面を明らかにした。具体的には、資源の整備状況やあり方、文化活動としての側面、劇場の機能に着目する３つの分析視点を導入した。これらの視点を包含したより広い概念を観光資源として捉え、同会の第二回公演以降の活動をたどった。公演に先立つ行事である道頓堀川の船乗り込みが夏の風物詩として定着し、歌舞伎興行の復興への取り組みが継続されてゆく経緯について、松竹との関係性や大阪という場の文脈に照応させ詳述した。特筆すべき同会の取り組みとして、新規観客の獲得のための方策、機関誌『大向う』のメディアとしての役割を検証し、それらがもたらした成果が歌舞伎ブームの強力な要因になったことを論証した。同会の活動が、必ずしも順調な行程ばかりではなかったことも述べた。そのことによって、松竹との関係性を浮き彫りにすることができたと考える。そして、大阪を嚆矢とする全国的な歌舞伎ブームが起こり、興行の安定化へつながっていくという局面を指摘し、そのことが松竹の劇場運営の施策へ組み込まれ、大阪松竹座という形に帰結したことを実証した。ここまでが第二期についての作業であるが、大阪松竹座の新開場を「大阪における歌舞伎興行の復興」と位置づけた論拠として、第二期以降の動向を示した。第6章では諸相を叙述する形式を取った。諸相を論述する作業のなかで、第5章で定義した観光資源の概念が有効に作用できたと考える。この作業は、本論文における観光資源の概念の見方に対する一つの方法論である。まとめとなる第7章では、本論文で得られた新たな知見をもとに議論の整理を行った。

本論文の独自性は、ある価値の認定主体を特定することなく、本論文で定義した新しい観光資源の概念を適用し、関西歌舞伎についての検討を行ったことにある。例えば、大阪市が「関西歌舞伎は、当市の観光資源です」、あるいは松竹が「関西歌舞伎は道頓堀の観光資源です」と宣言すれば、関西歌舞伎は観光資源として認定され、観光目的に利活用されることになる。しかし、それを享受する側に立てば、認定主体が限定されることによって資源単体の可能性もまた固定化されるのである。その弊害を打破するために、本論文は観光資源について、第3章、第5章で検討した諸理論を援用する試みを行った。これは観光資源の価値や可能性を幅広く設定し、観光資源の概念を積極的に捉えるために、多角的な論拠を示す必要があると考えたためである。また、複数の主体の働きかけにより生成される多彩な価値を抽出するために、それぞれの学術分野で議論される理論を必要とした。つまり、総合芸術であり伝統芸能や商業演劇でもある重層的な価値を持つ歌舞伎という資源に対し、観光が持つ副次的、波及的な性質が及ぼす影響は多大であると考えられるためである。この作業によって、潜在的な観光資源である関西歌舞伎について、観光資源としての要素を先行させることが可能となり、その

価値を証明することができた。

本論文のもうひとつの目的は、「愛する会」を再評価することにある。興行史における同会の貢献については、第4章、第6章で指摘しえたと考える。とりわけ同会の最も重要な貢献は、「七月大歌舞伎」を継続させ、定期公演にしたことである。同会は大阪の歌舞伎興行の復興だけにとどまらず、大阪の文化の発展に大きく寄与したといえる。

本論文の試みは、歌舞伎の復興への取り組みと安定へ向けたさらなる活動の数々を通して、古典という歴史的「時間」を体現する歌舞伎と、大阪という固有の「場」の文脈における関西歌舞伎の資源のあり方について、把握が困難な波及的・副次的な観光資源としての価値を見出すための方法論であり、このことは文化研究が持つ有効性であるといえよう。諸主体の取り組みを経て生みだされた関西歌舞伎に対して、このような資源単体に付随する価値や波及する効果こそが観光資源といえるのである。そして、これからも関西歌舞伎が観光資源としての価値を発揮し発展してゆくことが、大阪文化に寄与しうることと考える。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（以倉　理恵　　）			
論文審査担当者	（職）		氏　　名
	主 査	教　授	中　　直一
	副 査	教　授	木村　茂雄
	副 査	准教授	村上スミス　アンドリュー

論文審査の結果の要旨

以倉理恵氏の学位請求論文「観光資源としての関西歌舞伎」は、衰退の傾向にあった戦後の関西歌舞伎が、1970年代後半以降、「関西で歌舞伎を育てる会」(及びその後身の「関西・歌舞伎を愛する会」)を中心に、地方自治体・労働組合・マスコミ、そして歌舞伎を経営する松竹および歌舞伎役者自身等、様々な主体による活動を通じて、次第に復活し、多くの観客動員が可能となるに至った経緯に着目し、これを観光資源論の観点から考察したものである。

本論文は全７章で構成されている。第１章では、本論文の基本姿勢として、関西歌舞伎を単に歌舞伎そのものとして研究対象として取り上げるのではなく、関西歌舞伎の復興に関与した様々な主体の活動を基軸に、観光を一つの資源と見る観光資源論の立場から考察を進めるとの立場が表明されている。第２章では、関西の歌舞伎界が戦後に至ると衰退の方向に向かい、これを復興させる動きが散発的に見られたものの、それらが成功を収めなかった経緯が記される。第３章では、本研究の理論的背景が述べられ、観光学、就中都市ツーリズムの考え方に基づき、都市に存在する劇場などの文化施設への訪問者に着目しつつ、こうした人々を惹きつける文化財を、資源論の立場から再評価しようとする。第４章は本論文の根幹をなす部分であり、「関西で歌舞伎を育てる会」が発足し、これ以降関西地区で歌舞伎が復興する様が詳細に論ぜられている。1970年代後半、労働組合の連合体である民労協の中に「関西で歌舞伎を育てる会」の事務局が設置されたことにより、継続性をもった歌舞伎公演の活動が開始された。「関西で歌舞伎を育てる会」は、支援組織である民労協、経営体である松竹のみならず、大阪府や大阪市といった行政、新聞社などの報道機関とも連携して、活動への公的支援を得る一方、広報の拡充を行った。こうして様々な主体の活動により、大阪という都市において、歌舞伎が再評価されるに至った様が本章では詳述されている。第５章では、観光資源の価値についての理論的考察が為され、芸術文化が「あるもの」としての資源でなく「なるもの」としての資源であるとの理論的立場から、歌舞伎の復興も、観光資源に「なる」という観点から評価しうるとされ、そうした理論的な根拠となる諸研究が本章において紹介されている。第６章では、「関西で歌舞伎を育てる会」の活動が、「関西・歌舞伎を愛する会」に継承され、また新たに大阪で松竹座が開場するなどの活動内容が紹介されている。そして第７章では、本論文のまとめとして、観光資源論の立場から関西歌舞伎の復興を論じた結果が概括されている。

以倉氏の論文は、「関西で歌舞伎を育てる会」発足前後の新聞報道や歌舞伎関係の雑誌、歌舞伎公演のパンフレット・案内文など、貴重な一次資料を丹念に収集した上で執筆されている。また以倉氏はこうした文献資料を使用するのみならず、「関西で歌舞伎を育てる会」関係者や、当時新聞で取材に当たっていた記者等に複数回にわたってインタビューを行い、こうしたオリジナルのデータを駆使して、本論文を構成している。この点で以倉氏の論文は、1970年代以降の関西の歌舞伎公演に関する第一級の資料を提供するものになっている。観光学や資源論、都市ツーリズム論など、本論文の理論的背景を論じた部分については、理論の紹介に比重を置きすぎた結果、歌舞伎の復興を叙述した部分との関係が必ずしも明確ではないという面も指摘しうるが、全体として見れば、本論文は貴重なデータに基づいて叙述され、関西歌舞伎の復興を観光資源論という学術的視点から評価しなおそうするものであり、この点で独創性に富む論文であると評価しうる。

以上により本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。